

幼児の共感性と向社会的行動の関係について

浅川 潔司*・吉川 知子**・古川 雅文***

(平成9年9月19日受理)

問 題

われわれの社会生活が円満にそして円滑に営まれるにあたって、より積極的に人と人とを結びつけるタイプの行動が果たす役割は大きい。そのような種類の行動に向社会的行動がある。

Mussen & Eisenberg (1980) は、向社会的行動を、「外的な報酬を期待することなく、他者や他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになるようなことをしようとする行為」と定義した。また、菊池 (1983) は行動レベルに焦点化して、向社会的行動をさらに次のような4つの条件を設けて捉えている。すなわち、向社会的行動の最初の条件としては、相手の利益となり、助けることにつながるなどの、他者あるいは他者の集団への援助行動があり、次に、このような行動を起こすときに相手からの外的な報酬を得ることを目的とはしないことがある。第3の条件としては、短い時間の損失から生命の危機に直面するなど、この種の行動には何らかのコストが伴う点が指摘されている。そして、最後の条件は、他者からの強制などによらぬ自発的な行動であるということであった。

向社会的行動が日常の生活場面で生起する過程を考えた Mussen & Eisenberg (1980) は、まず社会的責任の規範が内面化されるとともに、他者の困窮した状態が正しく認知できることをあげている。次に、相手の感情を理解すること、そして相手の要求を想像して、自分がどのように行動することが相手のためになるかを決定するのだという。さらに、他者の窮状を認知したとしても、現実には援助のための行動を起こす際には、動機づけの諸要因が機能することも指摘されている。

ところで、Levin & Hoffman (1975) や Mussen & Eisenberg (1980) は、共感性が向社会的行動を喚起する有力な動機づけ要因であるという。共感性は、認知面や感情面のどちらかに力点を置くかでさまざまに定義されるが、この両側面を包括した Feshbach & Roe (1968) は、知覚した他者の感情反応に対する反応者の代理的な感情反応だとする。具体的には、他者の感情の状態を弁別的に認知して適切な感情のラベル (喜怒哀楽) をつけ、次に、他者の考えや役割を予想して、最終的に他者が持つであろう感情を共有することである。このような定義に立脚すれば、単に窮状にある他者の状態を認

知するだけでなく、困窮する他者の感情と同様のものを持つことが、他者への援助動機として強く機能すると考えることができる。

このように考えると、共感性と実際の援助行動の間には一義的な相関関係が生じることも予想されるが、これまでの研究を概観すると、必ずしも一致した結果は得られていない。例えば、4歳児の共感性と協同行動の関係を検討した Levin & Hoffman (1975) は、両者に有意な相関関係を見いだしていない。また、Eisenberg-Berg & Lennon (1980) は4～5歳児を対象として、自然観察場面での援助行動や分与行動と共感性との関係を検討したが、その報告によれば、両変数間には有意な相関関係は生じていなかった。

他方、小学5年生を被験者として、被験児にVTRで犠牲者の悲しみに表出を観察させた後に、表情から情動反応を測定しトークンの分与率との関係を検討した首藤 (1984) は共感性と分与行動の間には関係があるという。つまり、相対的に高い共感反応を示した群の方が、低い群よりもトークンをより多く分与したのであった。また、被験者に困窮者の情動手掛かりが十分に認知できるように状況を設定して、5歳児について共感性と分与行動との関係を検討した浜崎 (1985) は、共感性と向社会的行動との間に有意な正の相関関係を見いだしている。

これらの一連の研究結果は、特性的な共感性が直接向社会的行動を喚起するというよりは、むしろ他者の窮状に視点を移し、より深くその心情を理解する場面で向社会的行動が発生しやすいことを示唆している。あるいは、他者の考えや役割を予想しやすいような状況であったり、共感者にそうした能力が十分に形成されているとき、共感性と向社会的行動との間に正の相関関係が生じるのかも知れない。

そこで本研究では、特性的な共感性の測定とともに、共感反応の内容分析を通して、分与行動や援助行動と共感性の関係を検討することを目的とした。幼児を対象とした従来の研究では、共感性と向社会的行動の関連を検討するにあたって、一つの行動レベルに限定されたり、絵や物語を使う想定場面法が中心である。この点について菊池 (1983) は、ごく限られた範囲の行動しか研究の対象になっておらず、その多くは物質的な援助や相手との接触のない場合のものだと指摘している。そのため本研究では向社会的行動の対象者が実際に存在する場

* 兵庫教育大学 幼児教育講座

** 神戸市立狩場台小学校

*** 兵庫教育大学 学校教育センター

面でその行動の生起を測定することとした。

方 法

被験者 兵庫教育大学附属幼稚園の年中児 43 名（男児 22 名、女児 21 名）、年長児 68 名（男児 39 名、女児 21 名）の計 111 名が被験者として本研究に参加した。その年齢の範囲は 4 歳 8 カ月～ 6 歳 7 カ月であり、平均年齢は 5 歳 6 カ月であった。

実験材料 本研究で使用された共感性測定尺度と各種の向社会的行動課題は以下のとおりであった。

(1) 共感性尺度 Feshbach & Roe (1968) の AST (Affective Situation Test) をもとに浅川・松岡 (1987) が作成した共感性尺度が使用された。この尺度では 4 つの情動場面（喜び、悲しみ、怒り、恐れ）ごとに 3 例話が準備され、合計 12 例話に対する被験者の代理的情動反応が測定された。これらの例話を提示するにあたっては、その内容を幼児が的確に理解できるように、例話の内容を略図化した図版 (B4 版サイズ) が用いられた。

幼児の代理的情動反応の測定には、渡辺・瀧口 (1986) にならって物語の主人公と被験者用の表情図版が使用された。また、共感性の質的な分析のために、幼児が表情図版を選択した後に、なぜそのような反応をしたのかが口頭で尋ねられ、記録された。幼児の反応に対して、例話の主人公と被験児自身の表情が一致したとき、これに共感得点として 1 点が与えられた。例話が 12 話用意されていたため、この共感得点の範囲は 0～12 点であった。また、共感反応の質的差異を検討するにあたっては、幼児の反応理由をもとに、浅川・松岡 (1987) の段階仮説に基づき次の 3 段階に分類した。すなわち、第 1 段階は情動場面情報への言及や情動状態のみへの言及であり、第 2 段階は自己体験の投射あるいは同一視的反応を含む反応であり、最終段階は再構成的な他者理解の反応であった。

(2) 魚釣り課題 この課題は、Radke-Yarrow & Zahn-Waxler (1976) を参考にして設定されたものであるが、本研究ではヨネザワ社製の魚釣りゲーム「ガブッチョ」が使用された。このゲームは、プラスチック製の池の中にあけられた穴から、一定の順序で規則的に魚が頭を出すところを、その口が開いた 2～3 秒間に釣り糸を引っ掛けて、魚を釣り上げるゲームであった。ゲーム用の釣り竿は 1 本だけ用意されていた。

実験者がまずこのゲームで遊んだ後、幼児のこの遊びへの興味を確認して釣りざおが与えられた。その後、被験児が遊びに熱中し始めたころをみはからって、同席していた女性の実験協力者が自分も遊びたいので、釣り竿を貸してくれるよう要請する。その際の被験児の反応によって、向社会的行動が生じたかどうか判断され、同

時に得点化（すぐに貸す：2 点、繰り返しの要請に応じて貸す：1 点、貸さない：0 点）がなされた。

(3) シール分与課題 魚釣り課題が終了すると、実験者は一緒に遊んだお礼として被験児に動物のシール 7 枚を与えた。シールを与えた後に、他にもっていない子どももいると告げ、仲のよいお友達にそのシールの何かを与えるかどうか尋ねられた。この課題は、Iannotti (1985) を参考にして設定された。このとき分け与えたシールの枚数によって、分与行動得点が与えられた。その範囲は、0～7 点であった。

(4) ボールペン拾い課題 一連の実験の最終セッションとしてボールペン拾い課題が設定された。上記 2 課題が終了すると、実験者が被験児を導いて実験室から退室するように状況設定がなされていたが、このとき、実験者が手にしていた 10 本のボールペンをさりげなく床に落とした。この際、実験者は 2～3 秒間の時間を置いてボールペンを拾い始めることとし、このときの被験児の行動が観察された。この課題では 2 種類の得点化がなされた。一つは援助行動を起こすか起こさないかにかかわるもので、すぐに拾い始めたときに 2 点を、しばらくたつてようやく拾ったときに 1 点、拾わなかった場合を 0 点とした。他の得点化は拾ったボールペンの数であり、この得点範囲は 0～10 点であった。

手続き 共感性の測定と向社会的行動課題の遂行はいずれも個別事態でなされた。なお、向社会的行動を測定する課題の遂行に先立ち、あらかじめ各幼児の共感性が測定された。向社会的行動を測定するにあたっては、魚釣り課題、シールの分与課題、ボールペン拾い課題の順で遂行された。実験室としては、幼稚園内の一室が使用された。実験の遂行には、実験者および実験補助者としてあらかじめ訓練を受けた心理学専攻の女子学生 2 名があたった。

結果と考察

共感性の発達的变化

本研究の手続きにしたがって、各被験児の共感性が測定され、得点化がなされた。年齢群別および性別に平均共感得点と S.D. を整理したものが表 1 である。この表に基づき、2 (年齢群) × 2 (性) の分散分析を実施したところ、年齢の主効果が有意 ($F=11.39$, $df=1/106$, $p<.01$) であり、年中児群に比べて年長児群の共感得点が高いことがわかった。性の主効果および交互作用はともに有意ではなかった。

このような年齢差が共感反応に認められた点については、従来の研究（例えば、渡辺・瀧口、1986）が見いだした結果と一致しており、幼児期において共感反応量が増加することを示唆した Mussen & Eisenberg-berg

(1980) の見解を支持するものであった。

表1 年齢群別、性別の平均共感得点とS. D.

年齢群	性 (人数)	平均値	S. D.
年中児	男 (N=22)	8.31	2.33
	女 (N=20)	7.65	3.18
年長児	男 (N=39)	9.23	2.13
	女 (N=29)	10.10	2.46

次に、幼児期の共感反応を質的な面から検討するために、その反応理由を浅川・松岡 (1987) にしたがって3段階に分類した。この第1段階は、提示された例話の情報を繰り返したり (情動場面情報への言及)、反射的な他者の感情理解にとどまり、他者の審理過程に言及しない理由づけ (情動状態のみへの言及) であった。第2段階には過去の自己体験に基づいてなされた他者の心的状況理解 (自己体験の投射) や他者を自己のうちに取り入れて、その感情に似たものを自己内に形成するような他者理解 (同一視的反応) が含まれた。第3段階は所与の情報に基づきながら、それを社会的に適切な文脈で再構成し、他者の心的状況をより細部にわたって理解した反応であった。

これら3段階の反応が幼児の共感反応中に占める比率を算出し、その角変換値の平均を年齢群および性別に整理したものが表2である。

この表に基づき、第1段階と第2段階とにわけて、それぞれ2 (年齢群) × 2 (性) の分散分析を実施したところ、両段階ともにいずれの主効果も有意ではなく、また有意な交互作用も見いだされなかった。

このような結果については、幼児の反応の多くが第1段階に分類されたことが考えられる。表からも明らかのように、第2段階の出現比率は低く第3段階はほとんど出現しないといってもよい。浅川・松岡 (1987) は、小学校3年生から6年生にかけて第1段階の反応が減少し、第2、第3段階の反応が逆に増加するという結果を得ている。そしてこの研究においても小学校1年生群の反応は約90%が段階1のものであった。このような結果と従来の結果を考えあわせると、幼児期の後期においては、共感反応量は増加するとはいえるが、その質的な変化は生じにくいものと考えられることができる。

表2 年齢群別、性別の各共感段階の出現比率(角変換値)

年齢群	性 (人数)	段階 1	段階 2	段階 3
年中児	男 (N=22)	74.69(16.30)	15.90(16.30)	0.00(0.00)
	女 (N=20)	78.10(15.76)	11.40(14.80)	1.20(5.38)
年長児	男 (N=39)	70.88(19.13)	18.90(18.83)	0.00(0.00)
	女 (N=29)	24.18(21.97)	16.34(20.75)	3.07(7.89)

共感性と向社会的行動の関係について

共感性と3種類の向社会的行動の発生との関係を調べるために、各種の向社会的行動の得点と共感反応得点、そして共感性の段階1および2の出現比率との偏差積率相関値が算出された。段階3については、その出現比率が極めて低いために、ここでは向社会的行動得点との相関値を求めることはしなかった。

その結果によれば、魚釣り課題の得点と共感反応得点および段階1、2の出現比率との間には有意な相関値は見いだされなかった。また、シールの分与においても有意な相関関係は認められなかった。一方、ボールペン課題においては、援助得点に関して、共感反応得点との間には有意な相関値が得られなかったものの、共感性の各段階の出現比率との間に周辺的に有意な相関関係が認められた。つまり、援助得点と段階1の出現比率との間には負の相関関係 ($r = -.20, p < .10$) が、そして段階2との間には正の相関関係 ($r = .19, p < .10$) が認められたのであった。幼児が拾い上げたボールペンの本数と共感性の各指標との間には、有意な相関関係は認められなかった。

この結果は、共感反応水準そのものがボールペンを拾うという行動とは関連性を持たないが、相対的に低い水準の共感反応を多く示すものほど実際的な援助行動を起こすことが少なく、逆により高次の共感性を示す幼児が他者への援助行動に従事する傾向が強いことを示唆している。

共感性が向社会的行動を動機づける重要な要因であろうとの観点に立脚してなされた幼児を対象とする他の研究 (例えば、Levin & Hoffman, 1975; Eisenberg-Berg & Lennon, 1980) でも、共感性と向社会的行動との間に有意な相関関係を認めるには至っていない。本研究の結果でも、共感反応量との関係ではこれらと同様に向社会的行動の有意な相関関係は見いだされなかった。しかしながら共感性の質的水準と援助行動の間には周辺的ではあるが有意な相関関係が成立している。このような事実は、今後、向社会的行動の動機づけ要因として共感性を考えると、その反応量のみに着目するのではなく、むしろ個人の共感性の質を問題にすべきことを示唆しよう。

本研究では、ボールペン拾い課題のほかに魚釣りの順番を譲る課題と自分が得たシールを他者に分与する課題も遂行されたが、これらの課題での向社会的行動得点は共感反応得点とも段階出現率とも有意な相関を示していない。この点に関しては、実験の手続き上、大人 (実験補助者の女子学生) からのほたらきかけがあることを問題点として指摘できるかも知れない。

菊池 (1983) は向社会的行動の成立の条件を定めたなかで、第4の条件として行動の自発性をあげている。本

研究の実施状況を考えると、上記の2課題ともいずれも大人からの要請が介在している。その意味ではこの場面において生じた行動を向社会的行動と捉えてよいかという問題もある。また、幼児にとって大人は権力者的な存在であり、ややもすれば大人からの働き掛けに対して幼児が従順に服従しがちなことが知られている（例えば、Kamii, 1980）。実験課題に即していえば、大人からの要請があったので、幼児は魚釣りの順番を容易に譲ったかも知れず、シールの分与も誘導的になされた可能性もある。この点に関しては、幼児を対象とするこの種の実験パラダイムには要請者としての大人が存在がバイアスをもたらすことに今後は留意すべきと思われる。また、もしそうであるならば、Eisenberg-Berg & Lennon (1980) が行ったように遊び場面での自然観察的な方法が妥当であるといえよう。

引用文献

- 浅川潔司・松岡砂織 1987 児童期の共感性に関する発達的研究 教育心理学研究, 35, 231-240.
- Eisenberg-Berg, N., & Lennon, R. 1980 Altruism and the assessment of empathy in the preschool years. *Child Development*, 51, 552-557.
- Feshbach, N., & Roe, K. 1968 Empath in six and seven-year olds. *Child Development*, 39, 133-145.
- Iannotti, R.J. 1985 Naturalistic and structured Assessments of prosocial behavior in preschool children: The influence of empathy and perspective taking. *Developmental Psychology*, 21(1), 46-55.
- 浜崎隆司 1985 幼児の向社会的行動におよぼす共感性と他者存在の効果 心理学研究 56 (2), 103-106.
- Kamii, C., & DeVries, R. 1980 Group games in early education: Implications of Piaget's theory. The National Association for the Education of young children, Washinton D.C.
- 菊池章夫 1983 向社会的行動の発達 教育心理学年報 23, 118-129.
- Levin, & Hoffman, M.L. 1975 Developmental synthesis of affect and cognition and its implications for altruistic motivation. *Developmental Psychology*, 11, 607-622.
- Mussen, P., & Eisenberg-Berg, N. 1980 Roots of caring, sharing and helping: the development of prosocial behavior in children. (菊池章夫 訳編 思いやりの発達心理 金子書房)
- Radke-Yarrow, M., & Zahn-Waxler, C. 1976 Dimensions and correlates of prosocial behavior in young children, *Child Development*, 47, 118-125.
- 首藤敏元 1984 子どもの共感と愛他行動に関する研究 -犠牲者の悲しみの共感が分与行動に及ぼす効果- 日本心理学会第48回大会発表論文集, 566-567.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ 1986 幼児の共感と母親の共感との関係 教育心理学研究, 34, 324-331.

Relationship Between Empathy and Prosocial behavior in Early Childhood

Kiyoshi ASAKAWA ¹⁾, Tomoko YOSHIKAWA ²⁾,
and Masafumi KOGAWA ³⁾

The present study was designed to investigate relationships between empathy and some prosocial behaviors in early childhood. 110 of young children from kindergarten took part in this study as subject. Each subject was asked to respond to Feshabach and Roe's Affective Situation Test before experiment session. In experiment, children's helping behavior and sharing behavior were observed. Results from a two way ANOVAs on empathy scores showed that elder children responded more empathically than younger children. Correlational analysis on the empathy and prosocial behaviors revealed that there were no significant correlation coefficient between empathy scores and prosocial behavior scores. However, children at a higher stage of empathic understandings of others were engaged in helping behaviors. No significant correlation between stage of empathic understandings and two of sharing behaviors was obtained.

Key words: early childhood, empathy, prosocial behavior, helping, sharing

¹⁾ Dept. of Early Education, Hyogo Univ. of Teacher Education

²⁾ Karibadai Elementary School, Kobe

³⁾ Center for School Education Research, Hyogo Univ. of Teacher Education